



TITLE:

京大広報 No. 688

AUTHOR(S):

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

---

CITATION:

京都大学渉外部広報・社会連携推進室. 京大広報 No. 688. 京大広報  
2013, 688: 3889-3912

ISSUE DATE:

2013-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196386>

RIGHT:



# 京大広報

No. 688

2013.4



CiRA International Symposium 2013で、ジョン・ガードン博士と握手を交わす山中伸弥IPS細胞研究所長(左)、挨拶を行う山中所長(右上)、ポスター賞授与の様子(右下) —関連記事 本文3910ページ—

## 目次

渉外・産官学連携に関して 渉外・産官学連携担当理事・副学長 小寺 秀俊	3890
<b>〈大学の動き〉</b>	
副学長が発令される	3892
理事補が発令される	3892
部局長の交替等	3892
平成25年度入学者選抜学力試験(個別学力検査) の結果	3895
平成24年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式 を挙げる	3896
平成24年度京都大学優秀女性研究者賞 (たちばな賞)表彰式を挙げる	3897
若手研究者海外派遣事業「ジョン万プログラム」 壮行式を挙げる	3897
京都府教育委員会との連携事業「福島県高校生 京・絆プロジェクト」を実施	3898
平成24年度京都大学総長賞表彰式を挙げる	3899
<b>〈部局の動き〉</b>	
寄附講座・寄附研究部門の設置、更新	3900
博士課程教育リーディングプログラム「デザイン 学大学院連携プログラム」が始動	3904

<b>〈寸言〉</b>	
音楽の仲間「花」A Hana of music ～ひとひら、ひとひらの花びらで一つの「花」を～ 下野 登士男	3905
<b>〈随想〉</b>	
カウンセラーからの発言 名誉教授 山中 康裕	3906
<b>〈洛書〉</b>	
北のキャンパスから 館野隆之輔	3907
<b>〈栄誉〉</b>	
興膳 宏名誉教授、鍋島陽一名誉教授が 日本学士院賞を受賞	3908
<b>〈話題〉</b>	
経営管理研究部・教育部が海外のビジネス スクール11校のスクール長を招いて 国際会議を開催	3909
CiRA International Symposium 2013を開催	3910
女性研究者支援センター主催・介護に関する 講演会シリーズ(第3回)を開催	3911
高等教育研究開発推進センターが第19回大学 教育研究フォーラムを開催	3911
<b>〈計報〉</b>	3912

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 渉外・産官学連携に関して

渉外・産学連携担当理事・副学長 小寺 秀俊

新緑も芽生え、希望を胸にした多くの新入生の声をキャンパス内で聞くと、新しい年度の始まりを実感いたします。平成25年度の年度はじめに当たり、私が担当しております渉外と産官学連携に関してご紹介したいと思います。

大学の果たすべき役割は、教育と研究に加え、第三の使命として社会貢献があります。私は、昨年10月1日付けで、渉外・産官学連携担当の理事・副学長を拝命し、産官学連携本部長も務めさせていただいております。大学の社会貢献には様々な形態がありますが、私の担当する渉外と産官学連携はその大きな柱であると考えています。また、近年、産業界・経済界の協力を得て実施する、インターンシップ等による社会リテラシーに関する教育、および産官学連携によるイノベーションの創出等は教育・研究においても重要であり、教育・研究・社会貢献が強く関連してきております。その、大学の窓口にあたる部分の役割を担っているのが、渉外と産官学連携の二つの機能です。

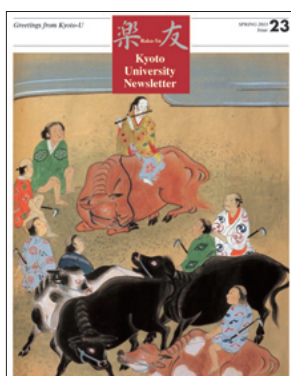
渉外では、社会と連携する様々な事業を行っておりますが、本学の教育と研究の内容および成果、さらには大学の現状を正確かつ迅速に発信することが重要です。ホームページや紅萌・楽友(広報誌)等の各種冊子を通じた広報活動もその一環であり、大学



の社会への窓口として、大学の現状や成果をお伝えするとともに、学外からの様々な情報や意見をお受けすることもその役割です。今後の広報のあり方や方法を検討し、改善を全学の協力を得

て進めております。

また、本学の卒業生・修了生・元教職員等からなる同窓会の構築と活動の支援にも力を入れております。平成24年度末現在で京都大学同窓会には、国内に73、海外に22と、全部で95組織が加入しておりますが、これら同窓会の行事やホームカミングデイの開催を通じて卒業生同士の交流を深めていくとともに、卒業生と大学との連携強化を図っています。一方、日本のみならず世界の大学との厳しい国際競争を勝ち抜いていくためには、寄附金による資金力の強化によって大学の財政基盤を固めることが必要不可欠です。世界のトップを争う各国の大学間では、このことは常識となっており、本学においても早急に取り組んでいかなければなりません。皆様からの



(左)楽友、(右)紅萌



京都大学基金のホームページ  
<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/>



寄附金により、学生・若手研究者の留学の支援や外国人留学生の住環境を含めた支援、さらには、クラブ・サークル等の学生の課外活動への支援等についてより一層の充実を図りたいと考えております。

さらに、広く一般の人々に向けて、大学が生涯にわたって人生の支柱となるという大学基軸論に則り、研究成果の発信や生涯学習の機会を提供する「京都大学春秋講義」、「京都大学未来フォーラム」や「東京で学ぶ 京大の知」の開催、また、より地域と連携するためFM京都における本学の研究者紹介「Kyoto University Academic Talk」(毎週水曜日の15時20分から)を放送しております。こうした社会との関わりを通じて、社会から大学がどのように見られているかを理解し、その情報を大学改革へも反映しております。

私のもう一つの担当事項である産官学連携も大学が果たす社会貢献の大変重要な機能の一つであり、産官学連携本部がその役割の一翼を担っております。大学が創出した研究成果を国内のみならず、広く社会に還元することがその役割です。

産官学連携本部の活動は大きく三つの事業からなります。第一は「プロジェクト構築事業」です。本学の研究成果、シーズを元にした国家プロジェクトを含む新規産官学連携プロジェクトの構築です。第二は「知的財産の権利化事業」です。長期的な研究開発や日本の産業振興に役立つような知的財産の確保に努めています。第三は「技術移転事業」です。「京都大学は基礎研究を重視しており産官学連携からは一番遠い大学」という認識があると思います。基礎研究を重視し「自由な発想」の下で研究を行うことは大変重要ですが、研究から生まれた成果を社会に様々な形で還元することも重要です。本学は産官学連携本部の設置以来、この研究成果の社会移転に取り組み、平成23年度の特許等収入実績は、国内で1位の実績を上げており、今後とも積極的な研究成果の移転を通じて社会貢献を加速してまいりたいと思います。

産業界・経済界に目を向けますと、平成20年のリー

マンショック以降、景気復調の兆しが見えない状況にあります。本学としては学内の産官学連携の活性化だけに止まらず、地域の産業や行政、他大学等と連携をとりながら、大学が中心となった産官学連携によって、日本における革新的なイノベーションの一翼を担えるよう俯瞰的な活動を推進していくことが、いま大学に求められている使命であると考えております。

この使命を果たすべく、国内外の学術研究機関や大学との連携および企業との連携による、これまでに無い、より組織的な技術移転と、その結果生み出されるイノベーションをアンダーワンルーフで実現することが望まれています。本学は、技術移転(IUUI:Industry-University-University-Industry)を目指したオフィスをロンドンに開設し、イギリスをはじめフランス・ドイツ等へのIUUI連携の構築を進めておりま

す。また、平成24年度の補正予算において、国際科学イノベーション拠点整備事業の予算を得ることができ、今後、国内外の大学や企業が連携できるアンダーワンルーフのイノベーション拠



英国のブリストル大学と共催したシンポジウムにて、(上)産学連携に関するセッションを実施、(下)講演会場の様子

点を本学吉田キャンパスに構築し、新たな社会構造や産業創成を実現して行く予定です。

本学の構成員全員と社会の協力を得て、全力でこれらの業務を進めて参りたいと思いますので、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



## 大学の動き

### 副学長が発令される

村中孝史国際高等教育院教授が副学長に4月1日付けで任命された。任期は平成26年9月30日まで。



大学改革担当  
村中 孝史（新任）

### 理事補が発令される

石川裕彦防災研究所教授、木原正博医学研究科教授および石原慶一エネルギー科学研究科教授が理事補に4月1日付けで任命された。

（新任）

総務・企画担当	石川 裕彦	防災研究所教授	任期：平成26年9月30日まで
病院・国際担当	木原 正博	医学研究科教授	任期：平成26年9月30日まで
研究担当	石原 慶一	エネルギー科学研究科教授	任期：平成26年9月30日まで

（担当変更）

病院・国際担当	樫木 哲夫	工学研究科教授	任期：平成26年9月30日まで（前・研究担当）
---------	-------	---------	-------------------------

### 部局長の交替等

（新任）

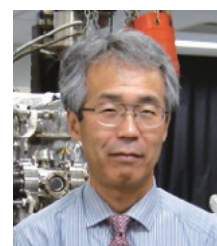
#### 法学研究科長・法学部長

山本克己法学研究科教授（法政理論専攻民事法講座担当（民事手続法））が、村中孝史法学研究科長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。



#### 理学研究科長・理学部長

有賀哲也理学研究科教授（化学専攻無機化学講座担当（表面化学））が、山極壽一理学研究科長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。



**農学研究科長・農学部長**

宮川 恒農学研究科教授(応用生命科学専攻応用生化学講座担当(生物有機化学・農薬化学))が、遠藤 隆農学研究科長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。

**総合生存学館長**

川井秀一総合生存学館(思修館)特定教授(森林科学)が、4月1日付けで指名された。任期は平成27年3月31日まで。

**エネルギー理工学研究所長**

岸本泰明エネルギー科学研究科教授(エネルギー基礎科学専攻エネルギー物理学講座担当(プラズマ物理・核融合科学))が、尾形幸生エネルギー理工学研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。

**基礎物理学研究所長**

佐々木 節基礎物理学研究所教授(極限構造研究部門担当(一般相対性理論, 宇宙論))が、九後太一基礎物理学研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。

**生態学研究センター長**

中野伸一生態学研究センター教授(生態学研究部門担当(陸水生態学・微生物生態学))が、椿 宜高生態学研究センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。

**生命科学研究科長**

石川冬木生命科学研究科教授(統合生命科学専攻遺伝機構学講座担当(分子生物学))が、米原 伸生命科学研究科長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。

**人文科学研究所長**

山室信一人文科学研究所教授(文化連関研究部門担当(近代法政思想史))が、岩井茂樹人文科学研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。

**防災研究所長**

大志万直人防災研究所教授(地震防災研究部門担当(地球内部電磁気学))が、中島正愛防災研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。

**放射線生物研究センター長**

高田 穰放射線生物研究センター教授(晩発効果研究部門担当(DNA損傷シグナル研究分野))が、松本智裕放射線生物研究センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。

**低温物質科学研究センター長**

吉村一良理科学研究科教授(化学専攻無機化学講座担当(無機物性化学))が、前川 寛低温物質科学研究センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。



### フィールド科学教育研究センター長

吉岡崇仁フィールド科学教育研究センター教授(森林生物圏部門担当(生物地球化学, 環境学))が, 柴田昌三フィールド科学教育研究センター長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成27年3月31日まで。



### 国際高等教育院長

北野正雄工学研究科教授(電子工学専攻量子機能工学講座担当(量子電磁工学))が, 4月1日付けで指名された。任期は平成26年9月30日まで。



### 大学文書館長

江崎信芳理事(総務・企画・情報環境担当(生物学))が, 林 信夫大学文書館長の後任として, 4月1日付けで指名された。任期は平成26年9月30日まで。



### (再任)

### 再生医科学研究所長

岩田博夫再生医科学研究所教授(生体組織工学研究部門担当(医用材料))が, 4月1日付けで再生医科学研究所長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。

### 数理解析研究所長

森 重文数理解析研究所教授(基礎数理研究部門担当(代数幾何学))が, 4月1日付けで数理解析研究所長に再任された。任期は平成26年3月31日まで。

### 原子炉実験所長

森山裕丈原子炉実験所教授(原子力基礎工学研究部門担当(核材料工学))が, 4月1日付けで原子炉実験所長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。

### 総合博物館長

大野照文総合博物館教授(情報発信系担当(古生物学))が, 4月1日付けで総合博物館長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。

### 福井謙一記念研究センター長

田中一義工学研究科教授(分子工学専攻量子機能化学講座担当(物理化学, 量子機能材料, 分子ナノ工学))が, 4月1日付けで福井謙一記念研究センター長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。

### こころの未来研究センター長

吉川左紀子こころの未来研究センター教授(認知心理学)が, 4月1日付けでこころの未来研究センター長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。

### カウンセリングセンター長

青木健次カウンセリングセンター教授(相談心理学)が, 4月1日付けでカウンセリングセンター長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。



## 平成25年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の結果

平成25年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の前期日程試験は、2月25日(月)・26日(火)および27日(水)に実施された。

学部・学科別の受験者数、合格者数、入学者数等は次表のとおりである。

学 部	募集人員 (A)	志願者数 (B)	倍率 (B/A)	第1段階 選抜合格者数	受験者数 (C)	倍率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	追加合 格者数	入学者数
総 合 人 間 学 部	120 <sup>人</sup>	439 <sup>人</sup>	3.7	421 <sup>人</sup>	415 <sup>人</sup>	3.5	6 <sup>人</sup>	1.4%	125 <sup>人</sup>	0 <sup>人</sup>	0 <sup>人</sup>	125 <sup>人</sup>
前期 文 系	65	227	3.5	227	227	3.5	0	0.0	68	0	0	68
前期 理 系	55	212	3.9	194	188	3.4	6	3.1	57	0	0	57
文 学 部 前期	220	665	3.0	665	656	3.0	9	1.4	226	1	0	225
教 育 学 部 前期	60	229	3.8	229	228	3.8	1	0.4	62	0	0	62
前期 文 系	50	188	3.8	188	187	3.7	1	0.5	51	0	0	51
前期 理 系	10	41	4.1	41	41	4.1	0	0.0	11	0	0	11
法 学 部 前期	320	780	2.4	780	770	2.4	10	1.3	332	0	0	332
経 済 学 部 前期	230	907	3.9	827	818	3.6	9	1.1	240	0	0	240
前期 一 般	180	629	3.5	629	622	3.5	7	1.1	190	0	0	190
前期 論 文	25	130	5.2	88	87	3.5	1	1.1	25	0	0	25
前期 理 系	25	148	5.9	110	109	4.4	1	0.9	25	0	0	25
理 学 部 前期	311	907	2.9	890	886	2.8	4	0.4	315	0	0	315
医 学 部 前期	250	683	2.7	667	656	2.6	11	1.6	269	7	2	264
医 学 科 前期	107	338	3.2	322	317	3.0	5	1.6	112	0	0	112
人間健康科学科 前期	143	345	2.4	345	339	2.4	6	1.7	157	7	2	152
看護学専攻 前期	70	171	2.4	171	167	2.4	4	2.3	74	6	2	70
検査技術科学専攻 前期	37	78	2.1	78	78	2.1	0	0.0	40	0	0	40
理学療法専攻 前期	18	28	1.6	28	26	1.4	2	7.1	19	0	0	19
作業療法専攻 前期	18	68	3.8	68	68	3.8	0	0.0	24	1	0	23
薬 学 部 前期	80	234	2.9	234	227	2.8	7	3.0	84	0	0	84
薬 科 学 科 前期	50	129	2.6	129	126	2.5	3	2.3	53	0	0	53
薬 学 科 前期	30	105	3.5	105	101	3.4	4	3.8	31	0	0	31
工 学 部 前期	955	2,761	2.9	2,761	2,722	2.9	39	1.4	960	1	0	959
地球工学科 前期	185	352	1.9	352	—	—	—	—	175	0	0	175
建 築 学 科 前期	80	284	3.6	284	—	—	—	—	82	1	0	81
物理工学科 前期	235	725	3.1	725	—	—	—	—	238	0	0	238
電気電子工学科 前期	130	432	3.3	432	—	—	—	—	133	0	0	133
情 報 学 科 前期	90	334	3.7	334	—	—	—	—	92	0	0	92
工業化学科 前期	235	634	2.7	634	—	—	—	—	240	0	0	240
農 学 部 前期	300	855	2.9	855	851	2.8	4	0.5	315	0	0	315
資源生物科学科 前期	94	—	—	—	—	—	—	—	97	0	0	97
応用生命科学科 前期	47	—	—	—	—	—	—	—	49	0	0	49
地域環境工学科 前期	37	—	—	—	—	—	—	—	40	0	0	40
食料・環境経済学科 前期	32	—	—	—	—	—	—	—	34	0	0	34
森林科学科 前期	57	—	—	—	—	—	—	—	59	0	0	59
食品生物科学科 前期	33	—	—	—	—	—	—	—	36	0	0	36
計	2,846	8,460	3.0	8,329	8,229	2.9	100	1.2	2,928	9	2	2,921

※工学部の学科別志願者数および第一段階選抜合格者数は、第一志望学科の数を示す。

※工学部地球工学科の入学者は、外国人留学生を対象とした国際コースの入学者14人を除く。

〔外国学校出身者のための選考の実施結果(外数)〕

学 部	募集人員 (A)	志願者数 (B)	倍率 (B/A)	第1次選考 合格者数	受験者数 (C)	倍率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	入学者数
法 学 部	10 <sup>人(以内)</sup>	22 <sup>人</sup>	2.2	18 <sup>人</sup>	9 <sup>人</sup>	0.9	9 <sup>人</sup>	50.0%	5 <sup>人</sup>	0 <sup>人</sup>	5 <sup>人</sup>
経 済 学 部	10	25	2.5	13	11	1.1	2	15.4	5	0	5

※受験者数・欠席率は最終教科時における数字である。

(学務部)

## 平成24年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式を挙

12月15日(土)、ホテル平安の森において平成24年度京都大学体育会スポーツ表彰授与式を挙

このスポーツ表彰は、京都大学体育会規約にある「本会は、京都大学における体育の向上、運動の普及を図り、あわせて本学学生の心身の錬磨、品性の陶冶に資し、もって学徳兼備にして有為の人材を作ることを目的とする。」という精神に謳われているように、有為の人材として相応しい学生を体育会所属の部員から選考して表彰し、もって体育会に所属する部の一層の発展を図ることを目的として、平成19年度に設立されたものである。

今回は体育会会長賞11名、特別賞6名の計17名が表彰された。

表彰式では、小田滋晃体育会会長の挨拶、赤松明彦理事・副学長(学生担当)からのお祝いの言葉の後、小田会長より表彰状・記念品が贈呈された。

### 体育会会長賞(11名)

所属クラブ	氏 名
準 硬 式 野 球 部	井 浦 淑 仁
陸 上 競 技 部	岩 橋 優
アメリカンフットボール部	上 廣 淳 史
カ ヌ ー 部	岡 本 弘 晃
ア ー チ ャ ー 部	杉 本 拓 郎
弓 道 部	関 田 彩 美
アメリカンフットボール部	高 木 稜
ウィンドサーフィン部	土 山 絢 子
硬 式 野 球 部	内 藤 悠 太
ボ ウ リ ン グ 部	春 木 悠
剣 道 部	山 下 善 朗

### 優秀賞(6名)

所属クラブ	氏 名
男子バスケットボール部	大 井 一 輝
準 硬 式 野 球 部	高 木 雄 貴
フ ェ ン シ ン グ 部	谷 道 雄 太
アメリカンフットボール部	番 矢 大 輝
弓 道 部	増 野 祐 一 郎
少 林 寺 拳 法 部	森 田 昌 浩

(50音順)



体育会会長賞、優秀賞の受賞者集合写真

(学務部)

## 平成24年度京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)表彰式を挙行

優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰する制度である、京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)の第5回の表彰式を、3月1日(金)に芝蘭会館稲盛ホールで開催した。

表彰式は、最初に、男女共同参画を所掌する林 信夫副学長(法務・コンプライアンス担当)より、選考経緯に関する報告を交えた開会の挨拶があり、引き続き、松本 紘総長より、学生部門受賞者の医学研究科博士課程3年の飯間麻美氏、研究者部門受賞者の理学研究科 日本学術振興会(JSPS)特別研究員の今井(佐藤)薫氏に、それぞれ表彰状と記念楯が授与された。続いて、副賞の「ワコール賞」が、株式会

社ワコールの安原 弘展代表取締役社長から贈呈された。その後、松本総長から、受賞者への祝福の言葉と、さらなる活躍を期待するエールが送られ、また、安原社長から、受賞者への祝辞が述べられた。

引き続いて、受賞者による研究発表が行われ、飯間氏は「拡散MRIを用いた新たな非侵襲的乳癌診断法の開発」について、今井(佐藤)氏は「ホヤ胚を用いた遺伝子調節ネットワークの研究」について発表し、会場の参加者は熱心に聞き入っていた。

最後に、吉川 潔理事・副学長より、閉会の挨拶があり、盛況のうちに表彰式と研究発表を閉幕した。



松本総長と研究者部門表彰者の今井(佐藤)氏(左)、学生部門表彰者の飯間氏(右)



(研究国際部)

## 若手研究者海外派遣事業「ジョン万プログラム」壮行式を挙行

平成24年度・平成25年度京都大学若手研究者海外派遣事業「ジョン万プログラム」壮行式を3月1日(金)芝蘭会館稲盛ホールで挙行した。

ジョン万プログラムは、本学の次世代を担う若手人材を対象に、海外経験等の機会を支援し、国際的な活動を奨励・促進することを目的とする全学的プログラムである。このうち、「研究者派遣プログラム」および「研究者派遣元支援プログラム」は、海外で中長期に渡り研究活動を行う本学若手教員および、当該若手教員の所属する研究室等への支援を行うもので、平成24年度事業採択者が同10月に、平成25年度事業第1回公募にかかる採択者が同2月に決定し、このたび合同での壮行式を挙行したものである。

第1回目となる今回の壮行式は、平成24年度事業採択者8名のうち、現在すでに渡航中の2名を除く6名と、平成25年度事業の第1回公募における採択者・内定者計20名のうち16名の、合計22名が出席し、



会場の様子

松本 紘総長、吉川 潔研究担当理事・副学長をはじめとして、研究者派遣元支援プログラムの採択者である研究室の教授や、派遣元の部局長など、多くの本事業関係者が参加して行われた。

吉川理事による開会の挨拶に続き、各採択者の渡航先研究機関と研究課題が紹介された。その後、採択者を代表して河原大輔情報学研究科准教授が松本



総長から推薦状を受け取り、続いて米国コロラド大学での研究計画を発表した。

松本総長は挨拶で、江戸後期に渡米し、その後、明治にかけて活躍したジョン万次郎の人生を振り返り、これから渡航する本学の若手教員にもぜひ自らの道を切り拓いてほしい、と激励した。

最後に参加者全員で記念撮影が行われ、これから渡航する若手教員に向けて参加者より温かいエールが送られた。

若手研究者海外派遣事業「ジョン万プログラム」は、毎年2回の公募を予定しており、次回の公募(平成25年度事業第2回公募)は、平成25年6月頃に予定している。



記念撮影

(研究国際部)

## 京都府教育委員会との連携事業「福島県高校生 京・絆プロジェクト」を実施

3月4日(月)から3月6日(水)までの3日間、京都大学と京都府教育委員会との連携事業として「福島県高校生 京・絆プロジェクト」を実施した。このプロジェクトは、本学と京都府教育委員会が連携して、福島県の高校生に対し、夢や希望を持って高校生活を送ることができるように、京都ならではの体験活動を実施することを目的に招待するものである。このたびは3日間の行程で、福島県立の4つの高校から22名の生徒が参加した。

本学への招待は初日の3月4日であり、はじめに総合博物館の見学を行った。訪れた高校生は、1階ロビーで行った歓迎式において、大野照文 総合博物館長による挨拶を受けた後、開催されていた特別展「ウフィツィ・ヴァーチャル・ミュージアム」の展示会場で、超高精細デジタル技術により再現したウフィツィ美術館所蔵の絵画10点を、人間・環境学研究科の大学院生による解説に耳を傾けながら、熱心に鑑賞した。



人間・環境学研究科の大学院生による解説



野菜から取り出された色素と、成分分離のための試験紙

次に、より詳しく大学体験をしてもらうために、理学研究科の化学実験室を案内し、学部生向けの「野菜の色の分離実験」を大学院生や技術職員、同研究科社会交流室講師の指導により行った。実験では、野菜を細かくし、色素を抽出した液を、試験紙を用いて成分に分解した。参加した高校生は「楽しかったです。生物で習った単語がいっぱい出て、さらに勉強になりました。実験のやり方もすごく分かりやすかったです。高校と違って、より難しいことまでやっていて、興味がわきました」「京都大学はなかなか来られない所なので、来ることができて、とても良かったです。理系は普段あまり触れる機会がなかったので、とても充実した時間を過ごせました」と感想を述べた。

続く行程で、高校生は京都の名所などでの体験活動を行い、充実した3日間を過ごした。

(総合博物館・大学院理学研究科)

## 平成24年度京都大学総長賞表彰式を挙行

3月18日(月)、学業・課外活動・社会活動等において顕著な活躍をし、京都大学の名誉を高めた学生および学生団体を表彰する「京都大学総長賞」の平成24年度表彰式を挙行した。

今回は全21件の推薦の中から選考の結果、7人と

3団体の計10件の受賞者が決定し、表彰された。

表彰状・記念品の授与後に、松本 紘総長が講評を行い、その後各受賞者からプレゼンテーション等が披露され、盛況のうちに終了した。



総長賞受賞者および関係者集合写真

受賞者・団体名	選考分類	選 考 理 由
医学研究科人間健康科学系専攻 DC2 前 迫 真人	学業	アルツハイマー病予防の研究に取り組み、Journal Biological Chemistry 誌の Paper of the week に選出されるなど、多くの高い評価を受けた。
生命科学研究科高次生命科学専攻 DC3 田 坂 元一	学業	神経ネットワークの研究に取り組み、Journal of Neuroscience に筆頭著者として論文掲載された。
理学部宇宙物理系 BC3 柴 山 拓也	学業	太陽型星のスーパーフレアの第一発見者となり、学部生でありながら Nature 誌掲載論文の第二著者となった。
工学研究科電子工学専攻 DC2 梁 永	学業	フォトリック結晶レーザの研究結果が Nature Photonics 誌に掲載され、その表紙を飾った。一方で、国際交流活動にも積極的に取り組み、京都府名誉友好大使に任命されている。
工学研究科 チーム TBT 代表 工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 MC1 中 野 篤	学業	第3回ナノ・マイクロシステム技術コンテスト iCAN'12 に応募し、世界大会で準優勝を果たした。
法学研究科専門職学位課程 法曹養成専攻 DC3 品 川 皓亮	課外	「日本一やさしい法律の教科書」を出版。また、観光通訳ボランティアサークル活動において「Meet Us Kyoto」というサービスを立ち上げ、第14回キャンパスベンチャーグランプリ大阪にて、ビジネス部門最優秀賞に選ばれた。
公共政策大学院 MC2 矢 野 智史	課外	第10回尾崎行雄杯演説大会において演説し、最優秀賞を受賞した。
京都大学体育会男子ラクロス部 総合人間学部認知情報学科 BC4 松 永 健太	課外	全日本男子ラクロス大学選手権大会準優勝に貢献するなど、各種大会において優秀な成績を残し、日本代表選手に選ばれた。
京都大学かるた会 代表 理学部 BC2 下 村 智也	課外	第98回全国職域学生かるた大会 A 級および第19回全日本大学かるた選手権大会団体戦において優勝を果たした。
京都大学体育会山岳部 ザンスカール遠征隊 代表 文学部行動文化学専攻社会学専修 BC4 萩 原 宏章	課外	インド北西部のヒマラヤ山域にある6080m の未踏峰登頂に成功した。

(学務部)



## 部局の動き

## 寄附講座・寄附研究部門の設置，更新

4月1日に工学研究科および経営管理研究部・教育部に寄附講座が，iPS細胞研究所に寄附研究部門が新設され，医学研究科，農学研究科，エネルギー科学研究科および経営管理研究部・教育部の寄附講座，ならびに原子炉実験所の寄附研究部門が更新された。概要は以下のとおりである。

災害リスクマネジメント工学(JR西日本)講座(新設)	
1. 部 局 名	工学研究科
2. 名 称	災害リスクマネジメント工学(JR西日本)講座 (Disaster Risk Management Engineering (WEST JR))
3. 寄 附 者	西日本旅客鉄道株式会社
4. 寄附金額	総額 9千万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成28年3月31日 (3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(特定教授) 杉山友康 寄附講座教員(特定准教授) 大島義信
7. 研究目的	鉄道のような広域に亘るインフラ設備を維持・管理する事業者においては，巨大化，広域化，長期化する近年の自然災害に対して，総合的な設備管理手法を確立する必要がある，平成20年度から社会基盤安全工学(JR西日本)講座を開設し研究を進めているところであるが，その研究内容はハード対策が主体であった。今後，事業者のさらなる安全性の向上に向けては，避難などのソフト対策を含む減災や早期復旧・復興などに有効な多面的な防災対策が必要である。このような状況に鑑み，本寄附講座においては，自然災害に対する防災，減災，早期復旧・復興を目的としてより安全な市民生活に貢献し，併せて道路，鉄道，河川等，防災インフラを有する分野への展開，活用も図るものとする。
8. 研究内容	自然災害を対象としたリスクマネジメント工学
9. 研究課題	・自然災害(巨大地震，大津波，ゲリラ豪雨，竜巻等)におけるリスクマネジメントに関する研究 ・災害時の情報伝達，避難等のソフト対策に関する研究 ・防災インフラの管理に関する研究

ファイナンス(あすかアセット)講座(新設)	
1. 部 局 名	経営管理研究部・教育部
2. 名 称	ファイナンス(あすかアセット)講座
3. 寄 附 者	あすかアセットマネジメント株式会社
4. 寄附金額	総額 6千万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成28年3月31日(3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(客員教授(時間雇用教員)) 高橋正彦 寄附講座教員(客員教授(時間雇用教員)) 山口 修
7. 研究目的	資産運用業務の先端的な手法を研究し日本経済の収益性向上に貢献することを目的とする。
8. 研究内容	日本では成熟化が進み経済成長が低迷している。一方，日本は世界第2位の個人金融資産を有しておりその有効な活用が喫緊の課題であり，資産運用業の重要性が一段と増している。そのため，ファイナンス理論の観点から先端的な資産運用手法を研究し，日本の資産運用業の国際競争力を高めるために貢献する。
9. 研究課題	新しい資産クラスとして注目されるオルタナティブ資産は資産運用において注目されているが，そのリスク管理手法などはまだ研究が十分に行われていない分野でありこれらの研究開発を行う。

道路アセットマネジメント政策(国土技術研究センター)講座(新設)	
1. 部 局 名	経営管理研究部・教育部
2. 名 称	道路アセットマネジメント政策(国土技術研究センター)講座 (Road Asset Management Policy Chair)



3. 寄附者	財団法人国土技術研究センター
4. 寄附金額	総額 9千万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成28年3月31日(3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(特定教授) 田村敬一 寄附講座教員(客員准教授(時間雇用教員)) 青木一也
7. 研究目的	道路管理等の道路政策の一環として、今後のより高度で効果的・効率的なアセットマネジメントの立案および実施方策に関して研究を行う。
8. 研究内容	国土の利用や整備、保全、災害の防止等の公共の実務に携わる財団法人からの寄附に基づくという特徴を踏まえ、道路管理等の道路政策の一環として、今後のより高度で効果的・効率的なアセットマネジメントの立案および実施方策に関して研究を行う。
9. 研究課題	・道路に関するアセットマネジメント手法に関する研究 ・総合的な道路整備・管理の方法論に関する研究 ・道路に関するアセットマネジメントの体系化に関する研究

## 上廣倫理研究部門(新設)

1. 部局名	iPS細胞研究所
2. 名称	上廣倫理研究部門 (Uehiro Research Division for iPS Cell of Ethics)
3. 寄附者	特例民法法人上廣倫理財団
4. 寄附金額	総額 2億5千万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成30年3月31日(5年間)
6. 担当教員	寄附研究部門教員(特定准教授) 1名 寄附研究部門教員(特定准教授) 八代嘉美
7. 研究目的	iPS細胞研究およびiPS細胞を利用する再生医療の推進に伴い解決を要する倫理課題についての研究を目的とする。
8. 研究内容	iPS細胞を利用した再生医療を実現するためには、社会のニーズや意識の所在を正確に把握し、適切な対処法を検討・準備し、提案する必要がある。これらの課題の解決に貢献するため、iPS細胞研究ならびにiPS細胞を利用する再生医療研究を取り巻く倫理的・社会的・法的課題の解決に向けた研究を行う。
9. 研究課題	iPS細胞ストックの作製やiPS細胞から誘導した細胞を医療に応用するため、iPS細胞研究ならびにiPS細胞を利用する再生医療に関する倫理面からの研究を行う。

## 呼吸管理睡眠制御学講座(更新)

1. 部局名	医学研究科
2. 名称	呼吸管理睡眠制御学講座 (Department of Respiratory Care and Sleep Control Medicine)
3. 寄附者	帝人ファーマ株式会社、フィリップス・レスピロニクス合同会社、 フクダ電子株式会社、フクダライフテック関西株式会社
4. 寄附金額	総額 2億7千5百万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成30年3月31日(5年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(教授相当) 1名 寄附講座教員(准教授相当) 1名 寄附講座教員(講師相当) 1名 寄附講座教員(助教相当) 1名
7. 研究目的	1) 覚醒・睡眠中を含めた24時間の呼吸管理を行い、多臓器疾患領域における重篤患者の治療成績の向上を目指す。 2) 上記を目指すための新機器、薬剤の開発を目指す。 3) 睡眠障害が各種病態に与える影響を学際的に検討する。 4) 呼吸管理・睡眠医学を適切に行える医師および指導者の育成を行う。

8. 研究内容	1) 間歇的低酸素, 持続的低酸素, 高二酸化炭素血症が生体に与える影響を, 人, 動物, 細胞・分子生物学的に検討する。 2) 上記血液ガス異常による循環障害, 代謝障害の影響を解明し, 同障害を起こしやすい人の遺伝子学的検索。 3) 侵襲的・非侵襲的呼吸管理法の有効利用法の検討。 4) 24時間の呼吸管理による, 術後合併症の予防と, 難治病態の治療成績の向上を目指す呼吸の分子生物, 生理, 調節の研究 5) 睡眠呼吸障害領域におけるCPAPなどにかわる新しい治療法の確立, 創薬の展開。
9. 研究課題	1) 現状では治療困難な急性肺障害(ARDS, 間質性肺炎の増悪など)の治療成績の向上と急性肺障害の進展を予防する治療法の確立および新治療法の開発。 2) 糖尿病, 肥満, メタボリックシンドローム, 心不全をはじめとした心血管障害患者の本邦における睡眠呼吸障害合併頻度の検討と適切な治療法の普及と新規治療法の開発, 臨床試験の実施 3) 学際的睡眠医学の教育と侵襲・非侵襲呼吸管理法の教育と事故の防止

### 食と農の安全・倫理論講座(更新)

1. 部 局 名	農学研究科
2. 名 称	食と農の安全・倫理論講座 (Food and Agriculture Ethics and Safety)
3. 寄 附 者	株式会社本田味噌本店, 株式会社銀閣寺大西, ヤマサ蒲鉾株式会社, エスフーズ株式会社, 全国農業協同組合中央会, 故・永井幸喜, 株式会社モリタ屋, ヒガシマル醤油株式会社, 鹿児島県経済農業協同組合連合会, エスケー食品株式会社, 株式会社ロック・フィールド, 株式会社明石菊水
4. 寄附金額	総額 3千3百万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成28年1月31日(約3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(准教授相当) 工藤春代 寄附講座教員(助教相当) 鬼頭弥生
7. 研究目的	世界的な問題となっている食品安全や環境問題の解決に必要なとされながら, まだ未確立・未着手である科学ベースのリスク管理, 倫理, ステークホルダー間のコミュニケーション研究を関連分野と協力して進め, その学識基礎を固めるとともに実践的な手法の確立を目指し, 若手人材を育成する。また, その成果により農学部/研究科全体のガバナンス教育に寄与する。
8. 研究内容	関連分野と共同して実施するプロジェクト研究において, 科学的基礎による食の安全や環境問題の解決のためのリスク管理システム, 先端科学技術を含んで拡大した農学研究を支える農学倫理, 技術者倫理, 農業・食品産業倫理の探求と確立, それらの基礎となる消費者・事業者行動分析, および農学, 食学(フードサイエンス)や農・食に関する研究者や市民, 事業者, 行政をはじめとする関係者の意思疎通・相互理解のための基礎研究と手法の確立を進める。
9. 研究課題	(1) 食品由来のリスクの管理システムに関する研究 (2) 農学倫理, 農業・食品産業倫理, 技術者倫理の確立のための研究 (3) 消費者行動分析, リスクコミュニケーション, フードコミュニケーション, サイエンスコミュニケーションの考え方と手法に関する研究

### 太陽電池シリコン結晶科学講座(更新)

1. 部 局 名	エネルギー科学研究科
2. 名 称	太陽電池シリコン結晶科学講座 (Crystal Science for Silicon Solar Cell)
3. 寄 附 者	1) 株式会社第一機電 代表取締役社長 城井 正純 2) 第一電通株式会社 代表取締役社長 城井 正純 3) 株式会社リガク 代表取締役社長 志村 晶
4. 寄附金額	総額 2千7百50万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成26年3月31日(1年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(教授相当) 1名 寄附講座教員(助教相当) 1名

7. 研究目的	地球温暖化防止の決め手となる自然エネルギー源である太陽電池を普及拡大するため、安全で高純度かつ高品質なシリコン多結晶を高い歩留まりで製造するための結晶成長メカニズムを解明し、高純度、高品質、高均質なシリコン多結晶インゴットを製造できる実用技術を研究し、太陽電池の変換効率を格段に高める技術の開発を目的として設置する。
8. 研究内容	地球温暖化の防止のためには、究極の自然エネルギー源である太陽電池の普及が急務である。しかし、現在の太陽電池の普及率は極めて小さく、2050年までに総エネルギー消費量の10%を太陽電池で賄うためには、2010年からの40年間で1600GW(1GW：原子力発電所1基分程度)程度の規模にまで急速に高める必要がある。このような膨大な量の太陽電池を生産できる原料と実績は、シリコン結晶(全太陽電池の80%以上を占める)が有しているが、普及拡大のためには、太陽電池の発電単価を半分以上に低コスト化する技術の研究・開発が必要である。このような目的を達成するためには、高純度、高品質、高均質なシリコン多結晶を高い歩留まりで作製する必要がある。しかし、シリコン結晶は古くから研究され最も活用されている材料であるが、いまだに不明の点が多く、特に結晶成長のような動的過程で組織や欠陥が形成されていくメカニズムや、高温加圧加工条件下でSi結晶の塑性変形・加工がどのようなメカニズムで行われるかといった、結晶科学の観点に立った研究が必要である。
9. 研究課題	1) 太陽光エネルギー利用の観点から行う高効率太陽電池の研究 2) シリコン結晶科学の観点から行う革新的なシリコン結晶のエネルギー利用・応用の研究

## 京セラ経営哲学寄附講座(更新)

1. 部 局 名	経営管理研究部・教育部
2. 名 称	京セラ経営哲学寄附講座 (KYOCERA Chair of Management Philosophy)
3. 寄 附 者	京セラ株式会社
4. 寄附金額	総額 7百万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成26年3月31日(1年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(客員教授(時間雇用教職員)) 高 巖 寄附講座教員(客員教授(時間雇用教職員)) 高尾義明 寄附講座教員(特定助教(特定有期雇用教員)) 丁 瀟君
7. 研究目的	経営哲学の体系化および企業倫理の理論的・実践的枠組みを形成する。
8. 研究内容	経営哲学の体系化と下位体系としての企業倫理や企業理念を考え、応用倫理学としての情報倫理や環境倫理を取り込んだ枠組みを研究していく。
9. 研究課題	・ 経営哲学体系の構築 ・ 情報倫理・環境倫理の企業経営への適用 ・ 既存の経営学理論への経営哲学理論との接合

## 中性子医療高度化研究部門(更新)

1. 部 局 名	原子炉実験所
2. 名 称	中性子医療高度化研究部門 (Research Division of Advanced Neutron Therapy)
3. 寄 附 者	ステラファーマ株式会社
4. 寄附金額	総額 4千万円
5. 設置期間	平成25年4月1日～平成27年3月31日(2年間)
6. 担当教員	寄附研究部門教員(教授相当(客員教授)) 1名 寄附研究部門教員(准教授相当) 1名
7. 研究目的	加速器中性子源とホウ素化合物の組み合わせによる新規ホウ素中性子捕捉療法の開発を行い、適応の拡大を図るとともに、薬事申請のための治験実施を通じて承認医療への格上げの道筋をつける。
8. 研究内容	ホウ素中性子捕捉療法は原子炉中性子とホウ素化合物を組み合わせる研究が進められてきたが、中性子源としての原子炉は利便性に乏しく、適応の拡大や安定的な研究の推進、承認医療への格上げには不向きである。そこで、利便性が高い加速器中性子源とホウ素化合物の組み合わせによる新規ホウ素中性子捕捉療法の開発を行い、適応の拡大を図る。
9. 研究課題	加速器中性子源とホウ素化合物の組み合わせによる新規ホウ素中性子捕捉療法の開発



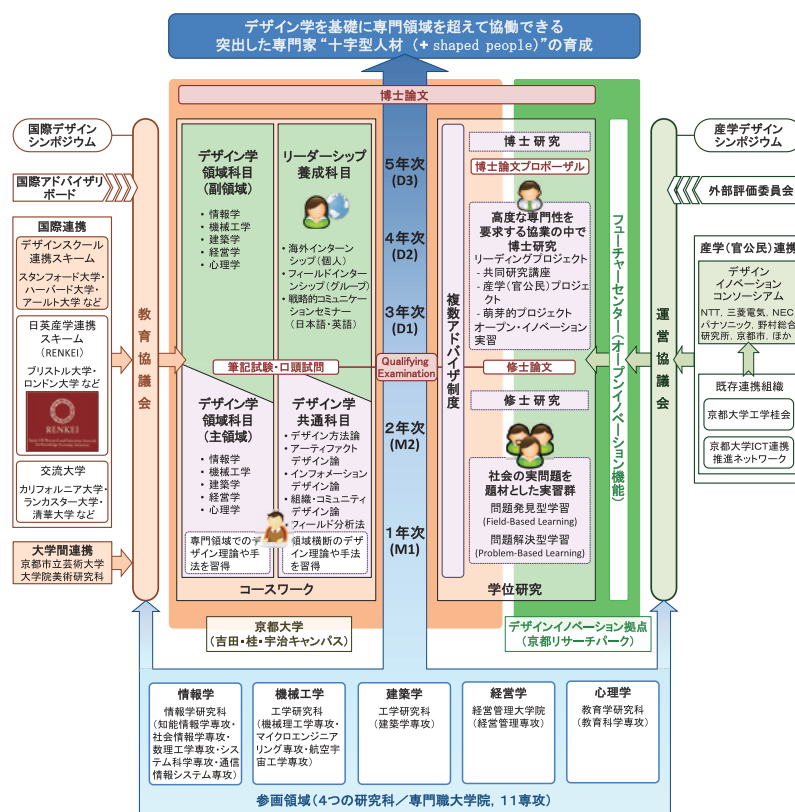
## 博士課程教育リーディングプログラム「デザイン学大学院連携プログラム」が始動

本学では、5年一貫の博士課程教育リーディングプログラム「デザイン学大学院連携プログラム」を平成25年4月から開始する。

国際社会は今、温暖化、災害、エネルギー、食糧、人口など複合的な問題の解決を求めている。そこで本プログラムでは、異なる分野の専門家と協働して「社会のシステムやアーキテクチャ」をデザインできる博士人材を育成する。またそのために、情報学や工学の基礎研究を結集し、複雑化する問題を解決するための、新たなデザイン方法論を構築する。これによって、Cyber(情報学など)とPhysical(工学など)の専門家が、経営学、心理学、芸術系の専門家と協働して、問題の発見と解決が行えるよう教育を行う。要するに専門家の共通言語として「デザイン学」を教育し、社会を変革する専門家を育成する。こうした人材を、ジェネラリストを意味する「T字型人材(T Shaped People)」と対比させ、専門領域を超えて協働できる突出した専門家という意味を込めて「十字型人材(+ Shaped People)」と呼び、本プログラムにより養成すべき人材像とする。

デザイン学の5年一貫教育を担当する「京都大学デザイン学大学院連携プログラム」(情報学、建築学、機械工学、心理学、経営学)を教育研究指導体制の中核とする。本学では、情報学研究科、工学研究科、教育学研究科、経営管理研究部・経営管理教育院(経営管理大学院)から20名のプログラム担当者が、参画11専攻を代表して参加する。さらに、芸術系領域を担当する京都市立芸術大学大学院美術研究科の参画によって、教育研究指導体制が強化されている。次に、デザインの対象となる領域との協業を行う「京都大学デザインスクール」(防災学、農学、看護学、医学など多様な専門領域を含む)を、広がりのある本プログラムの活動全体の通称としている。

優秀な学生をリーダーへと導くため、本プログラムでは、俯瞰力を鍛える「コースワーク」と、独創性



デザイン学大学院連携プログラムのカリキュラム

を育てる「学位研究」を備えている。(図参照)俯瞰力を鍛えるコースワークは、デザイン学共通科目とデザイン学領域科目(主領域)、博士後期課程におけるデザイン学領域科目(副領域)と海外やフィールドにおけるインターンシップなどから構成される。特にフィールドインターンシップは、「現場の教育力」を活用する新たな試みで、専門領域の異なる学生がチームを構成し、数か月フィールドに滞在して活動するものである。独創性を育てる学位研究は、博士前期課程における問題発見型/解決型学習(FBL/PBL)、博士課程後期におけるオープンイノベーション実習、博士研究を行うリーディングプロジェクトという3段階の実践教育の中で行う。リーディングプログラムの実習やプロジェクトを行う教育研究環境として、分散した本学のキャンパス(吉田・桂・宇治)と京都市立芸術大学のハブとして、地理的にもその中心に位置する京都リサーチパーク内にデザインイノベーション拠点を設置し、本プログラムの推進拠点とする。

(学際融合教育研究推進センター)

## 寸言

音楽の仲間「花」 A Hana of music  
～ひとひら、ひとひらの花びらで一つの「花」を～

下野登士男

1956年、京都大学医学部医学進学課程入学、女性なしの50名、多くの昆虫・蛙・蛇も住む宇治分校で教養時代が始まる。少人数なので纏まりがよく、勉強以外、野球・サッカー・ボート、芝居に能、学生運動と、自由を謳歌しつつ共に楽しみ、友情も育んだ。

小生は、以来サッカー漬けとなり医学部主将、卒後はOB会長、部長。医療技術短期大学部教授時代には、京都府初の大学女子サッカー部創設、全国大会にも監督として出場。

ノーベル賞受賞者故エックレス卿研究室でも恵まれた米国留学、医学部附属脳神経研究施設・生理学教室を経て、医療技術短期大学部部長2期、現在の医学部人間健康科学科の礎を築いた後、2000年停年退官。

その後京都の医療法人清仁会シミズ病院グループの一員として、それ迄の研究・教育だけでなく、街の第一線の医療従事者として働く機会を与えられた事は非常に幸運であった。

医学・医療以外に新しい挑戦をと声楽を始めた。それが契機で早々に京大病院でのボランティア・コンサートに誘われた。2004年12月21日クリスマス会である。

患者さんのための病院図書室「ほっこり」が最初のステージ。小生そして妻の歌、数学者でピアニストの大塚研一氏(現医学部准教授)、医学生で京大オーケストラ・コンサートマスターだったヴァイオリニストの竹田治彦君(現大阪赤十字病院医師)達との合同出演であった。これは非常に幸運な出会いであり、後になって見えざる手の配慮があったと思えた。

翌年、他に京大・音大関係者の何人かも加わり、音楽の仲間「花」を立ち上げ、定期演奏会以外に病院ボランティア・コンサートも重ね、患者さん達の本音に触れることも出来た。



「病が回復期に向かい生きてゆくための目標を定めたいのに、それが中々掴めない……。病床に在る時は、死への道程ばかり考え、後に残す家族への思いに終始捕らえられていた。生を得た今、一転何をなすべきか将来像が描けずもがいている……。」そうした心情の吐露に、小生は生も死も同じ座標軸に存在するものだと改めて理解した。

「無味乾燥な巨大病院で、このような美しいドレス姿の人達による生演奏に触れる機会があるとは想像外でした。出演者が精一杯演じて下さる姿に、私も一瞬一瞬を輝いて生き、悔いない生涯を全うしたい」等々。

京大・市立芸大の学長をされた故西島安則先生、名実共に「花」応援団長・元京都府立医科大学長藤田哲也先生ご夫妻、多くの知人・友人の情熱にも支えられ、音楽の仲間「花」は、英語のタイトルを創って下さったネイティブの支援も得て、順調に推移していった。

この幸運が永遠に持続するとの錯覚に溺れかけていた。が、思いがけない暗転が大口を開けて待っていた。そう！これこそが人の天命である。

去年5月11日、自分で見つけた膵臓癌の手術を、京大病院にて10時間余受ける破目となった。術後1ヶ月、気力だけでなく声をも全く失っていた。体重も18kg減った。

幸いにも8月には少し声が出始め、1曲だけが定期演奏会の舞台に立てた。立った瞬間、広大な原野に独り寄り寄らない瘦身がゆらゆらと陽炎のように佇む不安定な気持ちに襲われた。しかし、歌うにつれ、それ等は消え、「今自分は歌っている」唯それだけで安らぎを覚え、命を感じた。会場の方々も無心に耳を傾けて下さった。そのとき、「花」の理想とする、その場でしか咲き得ないひとつの「花」を咲かせることが出来たのである。

瞬間に消え去る音楽は人と人の心を空間でつなぎ、同次元を生きる者に共感を促す。

医療は心の慰めを必要とし、音楽は他の芸術・文学等と同じく心を満たしてくれるものである。

(しもの としお 医療法人清仁会 顧問 昭和38年医学部卒業)

## 随想

## カウンセラーからの発言

名誉教授 山中 康裕

平成17年に、25年間勤務した京都大学を辞めて、「カウンセラー」になった。「カウンセラーって何?」と訊かれると、「もとはカウンセラーだったんですが、ウの角(つの)を取って、ワになったんです」と言う。角をとれば丸くなる



し、ワになれば繋がる。ここでの「カワ」とは川のことであり、「河川救護士」などと注釈を加えるが、まだ世界で私一人なのだ。さて、その基本コンセプトは以下の如くだ。この頃は子どもも大人も、何かという、すぐにキレる。そして、とんでもない事件が頻発する。我われ精神医学や心理臨床学の専門用語で言えば、こころが「乖離」しているからだ。乖離とは「繋がっていない」「バラバラ」。何がバラバラなのか?それは、元来あった「たましい」との繋がりがキレて心と心がバラバラになっているという意味だ。何故そうなったか?私の考えでは、「自然」との繋がりが消えて「パソコン」や「ケータイ」に代表される器械にばかり依存しているからだ。それらは確かに便利で、瞬時に「つながった気分」にさせるし、事実メールだってすぐに繋がる。しかし、スイッチを切ればおしまい、それまであったかに見えた「関係性」は見事にキレる。それらはスイッチonの時だけの関係で、offともなれば全く関係はない。しかし、resetは可能だが、所詮onの時だけの儚いものなのだ。後ろに自然のバックアップが全くないから恒常性がない。

其処で私は考えた。自然界で、「つなぐ」という働きをしているものは何か?一番初めに浮かんだのが、「水」であり、その集積した姿が「川」であった。地上の水は言うまでもなく川を必ず低い方に向かって流れて行く。当初ちよろちよろの谷川が深い溪谷になり、やがてだんだん川幅を増す。周囲の岩石は長い間かかって削られ、巨岩がやがて礫から小石に、さらには砂や泥になって流れていく。その間川は村と村を繋ぎ、町と町を繋ぎ、やがては河口に出て海と

繋がる。

さて、一方、最近の子どもたちには「川は危ないので近づかない」という指導が幼稚園から徹底している。色々な川の付近を調査して回ったが、殆どが子どもが近づけないような何らかの細工がしてある。自然災害は怖いものだし、子ども一人での川遊びは危険であることも確かだ。しかし、そのお蔭で子どもたちは自らを守るすべや自然からいろいろなことを学ぶ機会を全く奪われてしまった。

カウンセラー活動の手始めに、先ず、109本の一級河川の形態や水流の性質、水中の岩石や生物の性状や生態、また護岸工事のあり方や橋梁の工法などの基礎調査をした。そして、私の活動で最も中核的な、子どもとの関わりとして、地元の漁協に協力してもらって、まず福井県の九頭竜川で、ヤマメの稚魚7000匹を幼稚園児たちと放流した。放流前に「彼等の半分は川に残り、半分は海に出て、およそ1000分の1の7匹が7年後に70cmのサクラマスとなって戻ってくる」と言う話を紙芝居で話した。すると、何も言えとも言わないのに、放流時に子どもたちは口を揃えて「きっと、帰ってこいよー!」と大声を出していたし、終わったあと彼らの目はキラキラと輝いた。

或いは、京都府の由良川で被虐待児たちと川遊びをしたが、彼らは瞬く間にサンショウウオやオヤニラミをつかまえた。「これらは絶滅危惧種だよ」というと「うん。分かってる。だから、すぐに返してやるよ」と平然と言う。却って、虐待児たちの方が遅く驚いたものだったが、彼らのこころを育み癒すのは、自然なる川なのである。

これらの記事は縁あって2007年の7月号から、岩波の〈科学〉という雑誌に18回連載した。エジプトのナイル河や、中国の黄河や長江、アメリカのミシシッピ河などの世界の川にも挑戦している。今度は愛知県の矢作川での子どもたちとの関わりイベントを計画中であるが、これらの活動は端緒に付いたばかりだ。それでも、有難いことに、NHKが興味を示してくれて、ラジオ放送で、この間の経緯を縷々語ることになっている。

(やまなか やすひろ 平成17年退職 専門は心理臨床学、総合河川学)



## 洛書

## 北のキャンパスから

館野隆之輔

現在、私が勤務する北海道研究林は、京都から1200kmほど離れた北海道東部の標茶町にある。釧路湿原の北側、根釧台地の西側に位置する。町の主要な産業は酪農で、いたる所に牧場が広がり、夏には牛が草を食む光景が見られる。年平均気温は5.8℃、1年のうち3～4か月ほどが月平均気温氷点下となる極寒の地である。



京都大学には、北は北海道から南は鹿児島まで隔地施設が全国にあるが、北海道研究林は北海道にある京大唯一の隔地施設である。現在、教員1名、事務職員1名、技術職員7名の合計9名の職員が勤務しており、標茶町と白糠町にあるそれぞれ1446haと880haの森林を管理している。1年に合計4週間ほど農学部を中心に様々な学部が実習に訪れるほか、町民向けのミニ公開講座や町内の子供たちを対象としたイベントなどを行っている。また研究では道東でのフィールド研究の拠点として、多くの森林科学関係の研究者が訪れる。

隔地施設には、研究・教育・社会貢献など様々な役割があると思われるが、研究林が辿ってきた道はやや複雑であるので簡単にご紹介したい。研究林は、もともとは演習林と呼ばれてきた。大学設置基準で、林学に関する学科がある場合には、教育研究に必要な施設として附属演習林を設置する必要がある。研究林は農学部の附属施設として、現場でのトレーニングが不可欠な実学的な学問分野の教育研究の場としての役割を担ってきた。しかし、京都帝国大学農学部が設置された大正12年の2年前には、芦生演習林が設置されている。さらにそれ以前から台湾、朝鮮、樺太にも広大な演習林が存在した。教育研究の場として活躍する以前より、演習林には大学が自己収入をあげるための財産林・経営林としての重要な役割があったのである。演習林からの収益は、大学予算のかなりの割合を占めた時期もあり、大学病院などと並んで創立当初の大学の財政面で重要な役割

を果たしていたようである。

現在の北海道研究林は、戦後に樺太演習林の代替として、国内寒冷地に自前の演習林をということで、昭和24、25年に標茶と白糠の陸軍省軍馬補充部用地跡の所管換えを受けて設置されたものである。設立当時からしばらくの間は豊富な森林資源を活用し、大きな収入をあげていた。山での造材の仕事に加えて、製材所も併設し、地域にとって経済や雇用創出などの面で重要な役割を担っていた。設立当初の森林伐採により、優良な大径木のほとんどが伐り尽くされてしまったのは非常に残念であるが、当時の社会情勢の中では仕方なかった面もあるのかもしれない。

その後、全国的な林業衰退とともに森林経営的な側面を十分発揮することが出来なくなる一方で、教育研究的な方向に重点を置くようになる。さらに平成15年からはフィールド科学教育研究センターとして、農学研究科附属施設から全学共同利用施設へと移行した。従来の森林分野の教育研究に加えて、森里海連環学という新しい分野の創出に向けての役割が加わった。北海道研究林でも近隣の北海道大学厚岸臨海実験所と合同実習を行うなど、新しい分野での教育活動にも取り組んでいる。

数十年から百年というスパンで見ると演習林・研究林に与えられた任務は、大きく変わってきた。森林づくりが長い年月を要する一方で社会情勢は劇的に変化する。今後は新興国の経済成長や環境保護意識の高まりに伴い、木材資源の国際的な獲得競争が激化していくものと考えられている。国内で木材を自給しなければいけない時代が来ないとも限らない。現状では、北海道研究林は、経営林としての役割を発揮するのは難しいが、遠くない将来に再びその役割が与えられることがあるかもしれない。守るべき森林は守り、使うべき森林は有効に活用していく。そんな時代に備えて、当面は教育研究や社会貢献などの役割において様々な工夫をしつつ、森林整備もしっかりと続けながら、北のキャンパスを守っていければと考えている。

(たての りゅうのすけ フィールド科学教育研究センター森林生物圏部門森林環境情報学分野 准教授、北海道研究林長)

## 栄誉

### 興膳 宏名誉教授、鍋島陽一名誉教授が日本学士院賞を受賞

このたび、興膳 宏名誉教授、鍋島陽一名誉教授が日本学士院賞を受賞されることになりました。授賞式は、6月に日本学士院で行われる予定です。以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

興膳 宏名誉教授は、昭和41年京都大学大学院文学研究科博士課程を修了後、愛知教育大学教育学部助教授、名古屋大学教養部助教授、京都大学文学部助教授、同教授を経て、平成12年3月停年により退職され、京都大学名誉教授の称号を授与された。京都大学文学部在任中には、文学研究科長・部長を併任された。本学退官後には、京都国立博物館長に就任、同職を退かれた後は、財団法人(現一般財団法人)東方学会理事長を務められ、現在に至る。



受賞の対象となったのは、平成20年に刊行された『新版 中国の文学理論』『中国文学理論の展開』に代表される、一連の中国古代文学理論研究である。劉勰『文心雕龍』や鍾嶸『詩品』等、中国六朝期に誕生した文学理論や文学批評を中国学術史上に系統付けるとともに、空海『文鏡秘府論』を詳細な注釈と共に全

訳され、同書の中国文学理論史における意義の確立に成功された。その研究の基礎に立ち、古くより「三絶」と並称される詩・書・画が、芸術論としても確かに深い繋がりを有することを解明し、同時代の庾肩吾『書品』を始めとする書論研究にも大きな業績を残された。また、これら文学理論の著述そのものが放つ作品としての美しさに光を当てられたことも研究の大きな特徴で、美文が全盛であった六朝期の詩人、潘岳、陸機、陶淵明、謝靈運、さらに唐宋の詩人や、日本漢詩文の分析に至るまで、幅広くかつ精密な諸研究は、必ず参照すべき重要な業績として国内外の学者に高く評価されている。またフランスでの講義などを通じて、早くから当地の東洋学者と学術交流を続けてこられ、日仏東洋学会会長を長年にわたり務められた。

今回の日本学士院賞の受賞はこれらの業績に対して贈られたものであり、誠に喜ばしい。

(大学院文学研究科)

鍋島陽一名誉教授は、昭和47年新潟大学医学部を卒業、同51年同大学大学院医学研究科博士課程を修了し、医学博士の学位を授与された。



同大学医学部助手、講師、財団法人癌研究会癌研究所研究員、主任研究員を経て、昭和62年11月厚生省国立精神・神経センター神経研究所遺伝子工学研究部長に就任された。

次いで、大阪大学細胞生体工学センター教授を経て、平成10年、京都大学大学院医学研究科教授に就任し、腫瘍生物学講座を担当された。この間、同教授は分子病理学教育を担当され、また、医学研究科では多くの大学院生の研究を指導された。

さらに、日本学術会議第20期、21期会員、京都大学医学研究科附属ゲノム医学センター長、同大学生命科学系キャリアパス形成ユニット長を務め、我が国の研究、教育の発展、若手研究者の育成に尽力された。

なお、平成22年3月京都大学を定年退職し、京都大学名誉教授の称号を授与され、同年4月より先端医療振興財団先端医療センター長に就任され、今日に至っている。

今回の授賞理由は、 $\alpha$ -Klotho、 $\beta$ -Klothoの発見とその生理的機能、分子機能の解析を基盤とした動物個体の恒常性を維持する遺伝子プログラムの研究によるものである。動物個体の発生分化機構、ならびに動物個体の恒常性維持機構の分子遺伝学的研究を行い、挿入突然変異の解析により多彩な老化疾患類似変異表現型をもつマウス系統を発見し、原因遺伝子； $\alpha$ -Klothoを同定した。また、その機能解析を進め、 $\alpha$ -Klothoがカルシウム代謝を統合する因子であることを証明し、カルシウム恒常性維持機構に関する新しい概念を提唱した。さらに、 $\beta$ -Klothoを発見し、そのコレステロール・胆汁酸代謝、エネルギー代謝制御における役割を解析しており、その発展が期待されている。

同名誉教授は、これらの一連の業績が高く評価され、朝日学術奨励金(昭和62年)、ベルツ賞(共同受賞)(平成10年)、上原賞(平成17年)、武田医学賞(平成19年)、文部科学大臣表彰科学技術賞「研究部門」(平成21年)、岡本国際賞(平成21年)、紫綬褒章(平成22年)、日本内分泌学会マイスター賞(平成25年)を受賞(章)されており、さらに、この度、学士院賞を受賞されたことはまことに喜ばしいことである。

(大学院医学研究科)



## 話題

## 経営管理研究部・教育部が海外のビジネススクール11校のスクール長を招いて国際会議を開催

経営管理研究部・教育部(経営管理大学院)(院長: 徳賀芳弘)は、3月2日(土)から3日間、経営管理大学院と密接な関係にある世界中のビジネススクール11校からスクール長を招き、グローバルなビジネス展開を担うリーダーの育成という社会のニーズに応えるために設置された、文部科学省「国際化拠点整備事業(グローバル30)」の一環で、ビジネス分野の高等教育と研究に関する国際会議を開催した。

参加したビジネススクールは、梨花女子大学(韓国)、国立台湾大学(台湾)、バンドン工科大学(インドネシア)、シンガポール経営大学(シンガポール)、IIMカルカタ(インド)、ライアーソン大学(カナダ)、コッチ大学(トルコ)、テュービンゲン大学(ドイツ)、ESSCA(フランス)、ノヴァ・ビジネススクール(ポルトガル)、ニュー・サウスウェールズ大学(オーストラリア)の11校であった。これは、経営管理大学院が提携関係を持っている大学のうち、特に緊密な連携をしているビジネススクールを各国1校に限って選定したものである。



集合写真

今回の国際会議は、提携関係にある各大学の革新的、独創的な教育プログラムの紹介を受け、同時に経営管理大学院の特色ある教育、研究の成果を広く世界に広報する機会にする目的で企画された。さらに、個別大学との関係に止まりがちな大学間交流を、本学がコアとなることによってネットワーク化していくという目論見も念頭におかれた。



国際会議の様子

初日は、まず吉川 潔理事・副学長より挨拶があり、続いて各大学からそれぞれのビジネススクールの概要や取り組みを紹介するプレゼンテーションが行われ、その後、学生との質疑応答があった。学生からは各大学の教育プログラム・大学施設についての質問もあり、大いに盛り上がった。

2日目は「国際経済社会における経営管理教育の革新的アプローチ—京都大学の事例」というテーマで、小林潔司経営管理研究部教授、Gautam Ray同教授より「アジアビジネス人材育成プロジェクト」、原 良憲同教授、臨済宗妙心寺松山大耕副住職より「おもてなしの心とビジネス」に関する報告があり、熱心なディスカッションが行われた。

3日目の最終日は、京都の老舗企業と先進企業への訪問を行った。渡文株式会社、松本酒造株式会社、および京セラ株式会社を視察し、京都の伝統文化と先進技術に触れた。

今回の国際会議は、日本人学生、留学生を問わず、予想以上の大きな教育成果が生まれ、さらに、文部科学省「国際化拠点整備事業(グローバル30)」における国際ビジネスに関わる教育研究の充実と学生のビジネス意識を向上させる機会になった。

(大学院経営管理研究部・教育部)



## CiRA International Symposium 2013を開催

iPS細胞研究所(CiRA)では、3月11日(月)、12日(火)に、百周年時計台記念館で、第2回目となる国際シンポジウムを開催した。今回は、'Raising the Next Generation of Stem Cell Research'と題し、幹細胞研究の未来を占うような最新の研究内容を、日本・米国・欧州の14名の著名な研究者に講演いただいた。

プログラムは大きく分けて二つのテーマを設定した。一つは、iPS細胞を作製する基盤的技術とも言える、細胞核の初期化メカニズムに関する研究であり、もう一つは、幹細胞を使って難病に対する新たな治療法を産み出す研究であった。

初期化メカニズムの研究については、米国ハーバード大学のコンラッド・ホッヘドリンガー教授、米国ホワイトヘッド研究所のリチャード・ヤング教授、英国ケンブリッジ大学のオースティン・スミス教授、ドイツのマックスプランク研究所のハンス・シェラー教授、そして、平成24年にノーベル生理学・医学賞を受賞したジョン・ガードン博士が発表した。

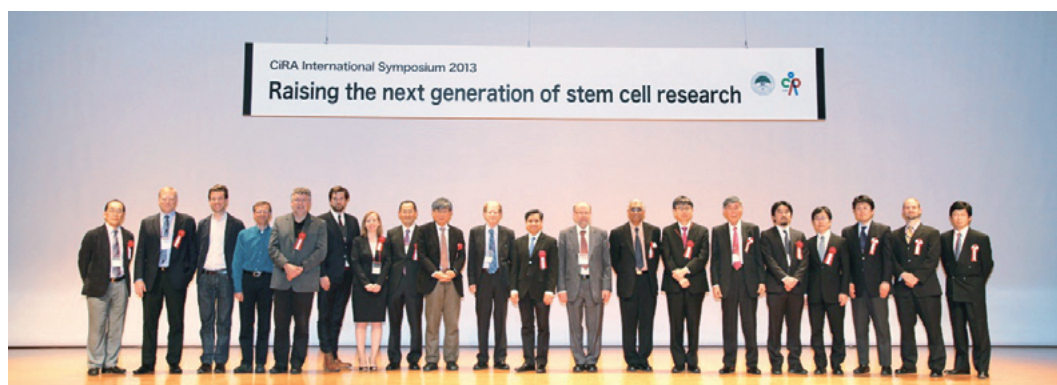
幹細胞を使った難病に対する治療法の研究については、平成18年にクローン羊「ドリー」を誕生させた英国エジンバラ大学のイアン・ウィルマット博士、心疾患に取り組む米国グラッドストーン研究所のディーパック・スリバスタバ教授、米国ハーバード大学で筋萎縮性側索硬化症(ALS)の研究を進めているケビン・エガン教授、同学で筋ジストロフィー

や糖尿病の治療法を開発するエイミー・ウェイジャーズ教授、脊髄損傷の再生医療に取り組む慶應義塾大学の岡野栄之教授、再生医療の基盤技術の確立を進める東京大学の中内啓光教授が講演を行った。また、米国国立衛生研究所(NIH)のマヘンドラ・ラオ博士と山中伸弥iPS細胞研究所長が、それぞれiPS細胞を備蓄する取り組み(iPS細胞ストックなど)について報告した。

2日目は、特別講演として、本学出身で理化学研究所発生・再生科学総合研究センターの西川伸一副センター長(当時)が、「Development of Hematopoietic Stem Cell: My Final Scenario」と題して発表した。加えて、CiRAで内閣府の最先端研究開発支援プログラム(FIRSTプログラム)に関わる中川誠人講師と森実飛鳥助教が最新成果を報告するTopics from the FIRST Programが行われ、招聘講演者らと活発に議論を行った。

今回は、2階の国際交流ホールで、82件のポスター発表が行われ、各国の幹細胞に関する研究者が、それぞれの最新の研究成果を披露し、議論し合い、特に優秀な発表をした3名にポスター賞を授与した。盛りだくさんのプログラムに、2日間でおおよそ550名の研究者が国内外から参加し、盛会の内に閉会した。

なお、このシンポジウムは、内閣府「最先端研究開発支援プログラム(FIRSTプログラム)」の支援を受けて開催された。



記念写真

(iPS細胞研究所)

## 女性研究者支援センター主催・介護に関する講演会シリーズ(第3回)を開催

3月2日(土)、女性研究者支援センター主催の講演会「介護は何をもたらすのか—家族・地域・社会で生きる知恵」を開催した。これは、育児介護ワーキンググループ推進員の鈴木和代医学研究科助教による企画で、誰もが直面する「老い」を安心して迎え、過ごしていくために、立場に関係なく考える場を提供することを目的とし、男女共同参画推進室との共催で事業を行った。



講演する波平お茶の水女子大学  
名誉教授

鈴木推進員の司会進行により、はじめに、稲葉 カヨ女性研究者支援センター長より講師の紹介と開会の挨拶があった。そして、波平恵美子お茶の水女子大学名誉教授より「介護は何をもたらすのか—家族・地域・社会で生きる知恵」の講演があった。

講演では、講師がフィールドワークの中で見聞きしてきた介護についてのエピソードや、人間がいか

に社会的な生き物であるかということ、また、家族の介護と地域の関わりなどについて、文化人類学的な視点からの興味深い内容が語られた。

講演会に続いて、円座になり、講演者と参加者の交流会「介護を語るカフェ」を開催した。教職員、学生、またその家族が、さまざまな角度から、介護の体験やこれからの制度のあり方などについて、話題提供・意見交換を行った。



交流会「介護を語るカフェ」の様子

(女性研究者支援センター)

## 高等教育研究開発推進センターが第19回大学教育研究フォーラムを開催

3月14日(木)、15日(金)の両日、吉田南キャンパスおよび百周年時計台記念館において、第19回大学教育研究フォーラムが開催された。

初日のシンポジウムでは、淡路敏之理事・副学長(教育担当)の挨拶に続き、昨夏出された中央教育審議会答申を受けて、「『学び』を改めて問う—主体的な学びとは何なのか—」をテーマに、渡部信一東北大学大学院教育情報学研究部教授／研究部長、美馬のゆり公立はこだて未来大学情報科学部教授、田中智志東京大学大学院教育学研究科教授、藤田英典共栄大学教育学部教授／学部長、松坂浩史文部科学省



シンポジウムの様子



高等教育局大学振興課大学改革推進室長の5氏による報告があり、その後、会場の参加者を含めて活発な意見交換がおこなわれた。

個人研究発表は、2日間にわたり13の会場で、大学教育改善の実践研究に関する発表計95件が行われ、また、小講演では、及川 恵東京学芸大学教育学部准教授、田島充士東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授、清水栄子阿南工業高等専門学校FD高度化推進室特命講師をはじめ、計11名による8件の講演が行われた。2日目の最後は、今年から「参加者企画セッション」としてさまざまな企画が持ち込まれ、13の会場で、大学教育の最新の知見と実践に関して情報交換や討論が行われた。

この大学教育研究フォーラムには、2日間で学内外の大学関係者計682名の参加者があり、本学およ



小講演の様子

び全国の大学の教育改善のためのリソースが集積したといえる。また、初日のシンポジウム終了後の情報交換会も、多くの参加者が一層の交流を深めるなど、盛会のうちに終了した。

(高等教育研究開発推進センター)

## 訃報

このたび、<sup>いわさ よしあき</sup>岩佐義朗名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

### 岩佐 義朗 名誉教授



岩佐義朗先生は、3月20日逝去された。享年84。

先生は、昭和26年京都大学工学部土木工学科を卒業、建設省建設技官、京都大学工学部講師、助教授を経て同39年教授に就任、水理学講座を担任された。昭和47年から河川工学講座を担任の後、平成4年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和60年7月から平成3年7月まで日本学術会議第13期および14期会員、昭和61年1月から平成2年1月まで国際水理学会副会長、同3年5月から同4年5月まで第79期土木学会会長、昭和63年3月から平成2年3月まで水文・水資源学会の初代会長等を歴任された。

本学退官後は、平成4年8月に地球工学研究会を設立し、会長を務められるとともに、同8年7月から同17年6月まで財団法人大阪地域計画研究所理事長を務められた。

先生は水工学、河川工学、中でも開水路流れや洪水氾濫水の解析法に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、貯水池、湖沼等大規模水域の流れと物質輸送、および環境影響評価手法に関する分野においても多大の貢献をされた。主な著書に『水理学』、『湖沼工学』、『最新河川工学』等がある。

これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成21年4月瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)